

歯学部は極めて特殊な環境である。歯学部に入學する学生は、卒業後、97.1%が医療施設の従事者となる。歯学部は大学の学部であるが専門学校的な面が強く、近年は特に歯科医師国家試験

の合格が教育現場の大きな目標の一つとなっている。2019年に実施された歯科医師国家試験の合格率は63.7%であり、ほかの医療職と比較して、かなり低い。国家試験の難易度が上昇したことにより、各大学の歯学部はカリキュラムの大幅な見直しを迫られている。筆者の担当している「衛生学」「口腔衛生学」は2～4年の講義と3・4年の実習で構成されている。衛生学は授業数・国家試験出題数ともに最も多い、歯科医師にとって重要な教科であるが、症例写真が豊富な臨床学問と比べると、残念ながら学生の時分には面白さや重要性が伝わりにくい科目の代表格でもある。恥ずかしながら、筆者も学生時代には衛生学を勉強する意義が分からず、暗記科目として苦労していた。だからこそ、自分が教える側に立った現在、学生にどうやってこの学問の楽しさを教えればよいのか

## 私の授業実践

教育現場の最前線から

### スライドデザインとアート

——デジタルデザインの重要性——

佐藤 涼一

● 東京歯科大学衛生学講座助教

と方法を模索していた。そのようなときに私大連のFD研修に参加できたことは幸いであつた。

研修中、歯科医師以外の先生方と講義方法についてディスカッションを行えたことは

大変ありがたく感じている。大学内では、教員のほとんどが歯科医師と歯学博士で構成されている。専門性の高い話ができるのは便利であるが視野が狭くなりやすく、教育を専門に学んだ先生方と話す機会は本当に貴重であつた。FD研修の場では、分野の異なる複数の先生方の板書による模擬講義を学生の立場で拝聴した。受講していて、ふと気付いたことがあつた。スライドと比較して色や写真のない板書という形でも、最初の3分ほどで、文字の配置や大きさからデジタルデザインのセンスは感じ取れる。話術以前に、デザインの良し悪しにより、入ってくる情報量と効率に明らかな差が生じると感じた。板書で感じるデザインの差異は、色彩や画像などの情報量が多いスライドではより顕著になるのではないだろうか。普段の講義は、学生に要点を空欄にしたレジュメを配付

し、パワーポイントで説明しながら、適宜空欄箇所に書き込ませる方式で行っている。パワーポイントはレイアウトの自由度が高く、文字のフォントも豊富であり、画像や動画も挿入できて便利だが、オブジェクトの配置次第では見やすくも難しくもなり得る。何が違うのだろうかと観察を続けた結果、一つの共通項が浮かび上がった。それは、スライドデザインが非常にシンプル、かつ情報量を抑えて作成されていることであった。デザインを勉強する機会がなかった筆者にとって、情報を抑えることは逆転の発想であった。衛生学の講義で学生に与える情報量は非常に多い。衛生学の範囲が、医療法規、行政範囲、環境衛生、口腔解剖・生理学、予防歯科臨床など、範囲が多岐にわたるためである。前述のとおり国家試験の難易度が上昇している背景もあって、授業内容は年々増加の一途をたどっている。学生が国家試験を受ける際に、万が一にも講義で習っていないなど、不利益をこうむる事態にならないようにというプレッシャーと、情報過多でパンク気味の学生の意見に挟まれつつ、講義を最適化するためにはデザインの工夫が不可欠であると感じた。研修後、すぐにスライドの文章の短縮化と簡潔書き形式への修正に取り掛かった。ユニバーサルデザイ

ンを意識した効果的な配色とコントラストの改善や、後のつながりが不明瞭な矢印記号の削除を心掛けると、ある程度は見られるスライドとなった。デザインの最適化は、スライドだけでなくレジュメにも応用が可能であった。レジュメの文字の大きさや太さを変え、情報のヒエラルキーを作成し、瞬時に要点を読み取れるようにしたものも有効であった。見せたいものを厳選し、見せたいもの以外のオブジェクトは目立たないように配色とコントラストを調整するだけで、情報量を極端に減らすことなく理解しやすいスライドの作成は可能となる。

学生時代、指導医の先生が「歯科治療は科学であるがアート（ART）である」と話していらつしやったことを覚えている。確かに、審美歯科や義歯・補綴物などは術者のデザインセンスの有無によって治療結果や患者の満足度が左右される面もある。患者と作品を同列化するのはいささか倫理的に問題があるように思うが、デザインのトレーニングや工夫は歯科医の養成にも必要なものかもしれない。筆者は現在、歯科臨床から離れているが、教育の分野でビジュアルデザインを生かした講義を行うことにより、教育へのアートの応用を目指していけたらと思う。

# 大変動期の経営学部教育の実践を考える

古川 一郎 ●武蔵野大学経営学部学部長、教授

## はじめに

2019年度に経営学部とデータサイエンス学部が新設され、武蔵野大学は11学部19学科を擁する大学となった。大きな変貌を遂げつつある本学であるが、実は「武蔵野大学」という校名を名乗るようになったのはそれほど古い話ではない。

本学は、建学の祖である高楠順次郎先生により、仏教の根本精神である四弘誓願（ほとけのねがい）を根幹として、1924年に武蔵野女子学院として築地本願寺の境内で生まれた。戦後は長らく武蔵野女子大学として知られていたが、2003年に武蔵野大学に名称変更し、翌年には男女共学になる。その後、「世界の幸せをカタチにする。」というブランドステートメントを

掲げ、現在も質的にも量的にも大きく変貌を遂げつつある。このような熱気の中で、2024年度には開学100周年を迎える予定である。開学時からすると長い歴史であるが、総合大学として新たな目標に向かって動き始めてからは、まだ20年もたっていないのである。

新設の経営学部は、経営学科と会計ガバナンス学科の2学科から構成される。幸いにして志願者数は予想を大きく超えて集まり、2019年4月には無事に新入生を迎えることができた。経営学部は経済学部から分かれる形で新設されたので、実質的には1年生から4年生までの学生を抱えている。

## 1 過去から語れない未来

大学として大きく変貌を遂げるなかで、経営学部と

データサイエンス学部が同時に新設されたことは、決して偶然ではないだろう。それは私たちの生活に直結する多くの領域で、コミュニケーション、エネルギー、ロジステイクス、そして最近ではライフサイエンスといった分野で、情報技術の飛躍的な進展に誘発され相互に連結したイノベーションが、新しい時代への移行を強力に押し進めているからである。AIとIoTが世界の仕組みを変えつつあるなかで、われわれの生活も企業活動も大きな変動期に入りつつあるといえよう。このような背景の下で、大学には新しい時代に対応する人材育成が求められているのである。

第4次産業革命ともいわれる現在の技術革新は、過去からは語れない未来社会を構築していくはずである。10年後にいま現在を振り返れば、多くの人が社会の変貌に驚くはずである。しかし、未来の社会を現時点でイメージすることは難しい。すなわち、小学生から老人に至るまで、ほとんどの人がスマートフォンを肌身離さずにとって生活していても、これからのAI×IoTの時代に私たち自身がどのようなライフスタイルを求めるのか、そのようなライフスタイルを実現するための都市や社会、それを支える企業社会が10年後20

年後にどのようなようになっていくかを正確に予測することはできないように思う。それは、未来が過去の延長線上にないからである。変動期にあっても、未来の社会は私たち自身の手によって偶発的に作られていく。だから、過去のデータは未来を予測するのに役に立たないのである。社会的規範も制度も変化していくはずである。

このように不確実性が大きく、かつ近未来に多くの職業がAIに代替されることが予見されているとしても、大学には少なくともそのような未来の社会を作っていくリーダーとなるべき人材を育成する責務がある。経営学部にあっても、多くの人々と共創し新しい社会を作っていく人材になるための基礎的な能力が身に付くような教育を実践していかなくてはならない。経営学部もデータサイエンス学部も実践的な側面の強い学問であり、社会的な期待が高まっていることが実感される。

## 2 経営学部の教育

武蔵野大学の教育の最大の特徴は、どの学部においてもアクティブ・ラーニングを積極的に取り入れている。

る点にある。アクティブ・ラーニングでは、教室内にとどまらず、広く社会体験を通してさまざまなことを学んでいく。短期・長期の海外研修や地方自治体の幅広い課題解決の企画提案など、数多くのプログラムがカリキュラムの一環として展開されている。ここでは、体験型教育を通して社会の多様な問題を認識することや、新たな知を獲得するだけでなく、学生同士、教員と学生、あるいはもつと広く他者とつながりあう中で、共感、信頼、対話による共創といった、より重要なことを学んでいく。特に1年次では、学部の垣根を超えた多くのプログラムが設定されている。

経営学部における専門知識の修得も、このような体験型教育による学びの基礎の上にカリキュラムが考えられている。すなわち、実践的な学問である経営学を主体的に学ぶために、1年次から経営戦略、マーケティング、会計、ファイナンスなどの専門分野をオムニバス形式の授業で幅広く履修するとともに、「グループ・コミュニケーション」や「経営フィールドワーク入門」などの授業を通して、ディスカッションや経営現場を経験することを重視している。

また、2年次には基幹科目群の履修が始まるが、そ

れぞれの授業においても、学外学修、ディスカッション、グループワークなど、単なる専門知識の修得にとどまらない高度な学びが行われるように工夫されている。

さらに、3年次、4年次では、少人数規模の「ゼミナール」における学びを重視している。ゼミナールでは、各教員がそれぞれの専門分野における高度で先端的な知識と研究・調査方法を教授し、学生はそれを修得することにより、自ら課題を見つけ、論理的に分析し、具体的な解決策を考え、提案していくという実践的な能力を身に付けることを目標としている。教員の指導の下で、長い時間をかけて論文を書くといった経験も、最終的な論文の内容もさることながら、経験そのものから得られる学びも大きい。

会計ガバナンス学科においては、公認会計士や税理士といった職業会計人を養成するプログラムを内包し、経営学科の会計学系統の科目をより強化するカリキュラムを特徴として、経営学科とは分離独立したカリキュラムが考えられている。ここでは、まず簿記という500年以上続くきっちりとした技能・技術をしつかりと学ぶことが重視される。このような実践的な知を習得するために、簿記学校の運営において全国的に有名

な学校法人大原学園とも、新たに提携を行っている。簿記検定など各種の会計系の資格試験においても、徐々にはあるが着実に成果を挙げつつある。

しかし、SDGsが認知されるなかで、企業活動もただ単に多くの利益を上げれば良いというものではなくなってきた。環境問題に対する取り組み、企業の海外展開・グローバル化などを含めて、企業活動も大きく変わってきた。このような企業活動が私たちの生活に大きな影響をもたらす以上、会计学に期待される範囲も広く深くなってきた。会計の目的は、最終的には企業の活動報告をしっかりと行うことであるが、その報告内容次第で市場の評価も大きく変わりうる。このような点に関しては、経営学科と同じく、学外学修などアクティブ・ラーニングから得られる知識が重要な意味を持つはずである。

### 3 ダイナミックに変化に対応できる ポジティブな感情を維持する

本学の経営学部の特徴を一言で言うならば、「若さ」であろう。もちろん、設立したばかりということもあるが、教員の多くが40歳前後であるということが、そ

の理由である。「若さ」は未熟というイメージにもつながるが、私はいまの大変動期にあっては、むしろこの点も大きなアドバンテージであると思う。経営学部の全ての教員が、変化の激しい現代ビジネスのフロンティアと日常的に接触している。常に、新しいことに興味を持ち、変化に対してポジティブな感情を持っている。

このことは、経営学部の教育改革にも現れている。どのようにしたら学生にとってより良い教育ができるのかを常に意識し、授業評価などのデータに基づいて教員同士が課題を議論し、可能な限り速やかに授業が改善されるよう、授業の見直しも頻繁に行っている。

これは、変化に対するポジティブな感情が良い方向に作用しているからである。教員の多くがまだ若くてエネルギーッシュなこと、教員間の風通しが良いこと、新しいアイデアを考えて実践することに前向きな教員が数多くいるということは、大学教育自体が変化するよう社会から期待される時代にあっては大きな利点である。この熱量をどのように維持し、新しい時代に即した経営学部教育のイノベーションを起こしていけるかどうか、今後ますます問われるであろう。

# わが 大学史の 一場面

日本の近代化と  
大学の歴史

## 多様でやわらかなキャンパスを求めて — 関西大学千里山キャンパスの100年と村野藤吾

橋寺 知子 ● 関西大学環境都市工学部准教授

### はじめに

関西大学は1886年、大阪市内で関西法律学校として創立し、130年を超える歴史をもつ。現在のメインキャンパスである千里山学舎は、1922年に開設され、2022年、大学昇格・千里山学舎開設から100年の節目を迎える。草創期は法律を学びたい人々とそれを支え教える人々が集い、働きながら学ぶ学校として、長く大阪市内に学舎を構えていた。大正期、大学昇格を目指し、施設の充実を図るために広い土地が求められる北摂の千里山への移転を決定したのである。

戦後、新制大学となり、さらに施設の充実を図る時期、千里山キャンパスの施設計画に登用されたのが日本近代の代表的建築家の一人である村野藤吾である。村野は1

950年頃から1980年まで、約30年間キャンパス計画にかかわり、現在の千里山キャンパスの骨格を形成した。本稿では、その時期を中心に千里山キャンパスの変遷を見る。大学のキャンパスは建物だけで成立するものではない。千里山キャンパスの立地や敷地の特色を村野藤吾はどのように捉え、どんな大学キャンパスを形づくらうとしたのか、その一端を示したい。

### 1 千里山学舎の始まり

1918年、北大阪電鉄が発足し、十三―千里山間が1921年に開通した（1925年に天神橋―淡路間も開通、現阪急千里線）。当時、関西大学は大阪駅西方の福島に学舎を設けていたが、手狭な状態にあった。1919年に大学令が施行され、高等教育機関の整備が進めら



1929年頃の千里山キャンパス

れる中、関西大学も大学昇格を目指し、施設の充実のため、広い土地が求められる北摂・千里山への移転を決定した。1922年、予科校舎が竣工し、千里山キャンパスの歴史が始まった。

北大阪電鉄から事業を継続した新京阪電鉄などからの援助により、「東洋一の大グラウンド」も完成、1927年には隅部の六角形の塔が特徴的な大学本館が竣工した。

これは、大阪市中心部にあつた住友合資会社旧社屋を譲り受けたものである。1928年には千里山キャンパス初の鉄筋コンクリート造の図書館が竣工、この建物は千里山キャンパス草創期の建物で唯一現存す

る。地名のとおり校地は丘陵地であり、丘上に校舎群を置き、自然の地形を利用して、南側の窪地にグラウンドが設けられ、斜面が観覧席となった。1936年、グラウンドの南側に新予科校舎が竣工した。現在、キャンパスは大きく四つの学舎に分けられ、第1学舎から第4学舎と称されているが、第1学舎と第2学舎のエリアが、まず戦前期に整備された部分である。

## 2 戦後のキャンパス整備

戦後、関西大学は新制大学への移行を果たし、さらに学舎の充実を図る必要があつた。大学院学舎（1949年竣工）と大学ホール（1952年竣工）の設計に村野藤吾が登用された。

村野藤吾（1891～1984）は日本近代を代表する建築家であり、世界平和記念聖堂（広島）や日本生命日比谷ビル「日生劇場」（東京）、大阪ではさごう大阪本店や大阪新歌舞伎座など、モダン建築から和風の個性的なものまで、型にはまらない幅広い造形で知られ、1967年には文化勲章を受章した。なぜ村野が関西大学のキャンパス計画にかかわつたのか、その理由やきっかけははっきりしない。『関西大学百年史』には、早稲田大学



出身の村野と同窓の理事の存在が関係したのではないかと、との記述がある。それも一つの要因だろう。1918年に大阪の渡辺節建築事務所に就職し、終生、大阪を拠点とした村野は、在阪の企業や財界人に長い付き合いのある顧客が多く、分野を超えた人的交流によって関西大学とのつながりが生まれたとも推測できる。1980年までの約30年間、村野は千里山キャンパスに関わる。一人の建築家が一つの場所でこれほど長く、設計に携わる機会はそう多くない。この30年は村野藤吾の全盛期とも重なり、千里山では約40棟の建物を設計した。

創立70周年事業として法文学舎（第1学舎）の整備がなされ、1955年に完成した。現在、大阪府指定文化財となっている円形平面の旧図書館（簡文館・関西大学博物館）は、戦前期建設の図書館に増築したものである。矩形の建物が多い大学キャンパスにおいて、円形



円形図書館（1955年竣工）

の建物は目立つ。グラウンド上部に、ピロティで持ち上げられて浮かぶ円形図書館のある景観は、関西大学千里山キャンパスのイメージとして多くの人々の記憶に残る。アイストップとなる建築を効果的に配し、景観にアクセントを与えている。

ここで時代を戦前に戻すと、千里山学舎の南西には、千里山花壇という行楽の場があった（1920年開園）。都心と郊外を鉄道で結び、沿線開発を行うビジネスモデルを創出したのは阪急の小林一三だが、千里線沿線にも良好な住宅地が開発され、当時の運営会社であった新京阪電鉄によって遊園地が設置されたのである。千里山花壇は拡張・整備され、1938年には千里山遊園に名称変更、翌年には当初の2倍の広さとなった。千里山遊園は地形を生かした遊園であり、約30メートルの高低差があつて、入口から園路を登っていくと、子どものための動物舎や西洋風花壇、運動場などが地形に応じて有機的に配置され、池や小川、滝も設けられていた。戦後、1950年に閉園したが、関西大学は将来のキャンパスを考えて、遊園跡地を取得し、「外苑」と称した。趣のある遊園地だったが、跡地を校地として活用するのは容易ではない。このエリアの施設群の設計も村野藤吾であった。



1960年頃の千里山キャンパス

外苑の整備は、まず大阪市内の天六学舎から移転が決定した併設校の第一高等学校・第一中学校の校舎建設から始まった。線路沿いの遊園時代の大運動場はそのままグラウンドとなり、観客席の上部の敷地に、白壁にスバニッシュ瓦の一高校舎が1953年に完成する。扇型の平面をもつ一中校舎（1957年）は、この頃全国的に建設された円形校舎の影響を受けたとも思えるが、遊園時代の施設の土台の形状を生かして設計されたと推測で

きる。高校・中学校の施設群は敷地の形状を注意深く読み取り設計されている。学生や生徒が利用する施設の整備が一段落した1965年、創立80周年事業として関西大学会館（大学本部）が竣工、

そして経商学舎（第2学舎）に一番近い外苑北端に、1968年に新設された社会学部の学舎（第3学舎1号館）が竣工した。

外苑の整備が進められたのと同時期、法文学舎に続いて経商学舎（第2学舎）でも校舎が増築された。さらにその東側に校地を拡張し、第4学舎（工学部）の建設が続く。工学部は、1958年に天六学舎に設置された。工業都市大阪の利点を生かし、いまでいえば産学連携を

目指し、工場の現場で実習を交えた教育・研究活動を行うことを企図したが、都心の天六学舎は手狭であったため、実験場などを充実させられず千里山への移転が決定、第4学舎1号館が1960年に竣工した。第4学舎はコンクリート打ち放しの柱梁のフレームに白色で大判タイル貼の壁



専門図書館（1964年竣工）

と開口部というシンブルな外観だが、タイルの質感や深い目地によって生まれる陰影が、季節、時刻、天候によって多様な表情を見せる。

1964年、専門図書館（円神館・ITセンター）が図書館の分館として第2学舎と第4学舎の間に竣工した。16本のエンタシスのある円柱によって円形の閲覧室が支えられ、そこからガラスのボックス状の研究室が吊り下げられている。なぜここでも図書館は円形なのか。第1学舎の図書館が円形だったから分館も、という理由もあったかもしれない。また近代建築史上、円形平面の図書館といえば、ストックホルム市立図書館である。村野は戦前から北欧建築を好んでいた。旧所員に聞くと、ストックホルム市立図書館は村野が好きな建築の一つだったそうだ。連想する所があったのかもしれない。現実的な理由としては、専門図書館の立地条件が関わっているだろう。経商学部と工学部に囲まれ、どちらかに正面を向けるわけにもいかない。また、正門から第4学舎方向への通路は専門図書館の前で軽く屈曲し、矩形では収まりの悪い不整形な敷地である。視線の抜けなどを考えると、角のない円形がよかったのだとも村野は語っている。複雑な条件に丁寧に対応しながらも、土壇場で個性的な解

をエイっとひねり出した感じもする。

第1学舎と第4学舎は約15メートルの高低差がある。この間の部分に学生の課外活動のための施設群である誠之館が設けられた。誠之館2号館（1962年竣工）は南側から見れば2階建だが、2階部分は北側で接地し、地形を生かした段状の構成である。誠之館3号館和室（1963年竣工）は広間と4畳半の茶室から成り、むくり（ふくらみ）のある軽やかな屋根が特徴である。茶道部などが利用し、村野の数寄屋建築で毎日稽古が行われている。

### 3 村野藤吾が目指したキャンパスとこれから

村野藤吾は、千里山キャンパスの仕事にどんな思いをもっていたのだろうか。千里山キャンパスの敷地は、高低差があり、平らな部分はないといってもいいくらい起伏に富む。また、まとまった用地が初めから用意されていた訳ではなく、徐々に拡張した、いわばデコボコでツギハギのキャンパスである。全体構想を描きにくく、設計は楽ではなかったであろう。

村野藤吾の造形の特徴は、「あそび」や「やわらかさ」などのキーワードで語られる。不揃いなものをつないで



第2学舎3号館



円神館（旧専門図書館）



第4学舎2号館

接地部分を浮かせ、衝突させない。

外壁の仕上げいろいろ。

タイル貼りやかき落としなど、建物ごとにテクスチャーが異なる。

いくには、あそび（余裕）が必要だ。ちよっとした段差や抜け道のような通路空間がキャンパス内には多く、段差をつなぐ階段やスロープには意匠をこらし、日常の往來のアクセントにもなっている。あそび（愛嬌）のある造形もみられる。鳩の彫刻が建物の隅に付いたり、断面がひょうたん型の柱があったりする。対立・衝突を避け、大規模な校舎でも地面との接点など

に細かな配慮を見せる。人の手が触れる箇所の材質や形態は、触り心地よく仕上げている。村野は、難しさを特色に変えたといえるだろう。

村野藤吾が千里山キャンパスから離れて40年、没後すでに30年以上が経つ。大学を取り巻く環境は大きく変わり、施設に求められるスペックも異なる。村野以後も施設の充実が図られ、建替えが相次ぐが、それでも村野建築は25棟現存している。2019年春、近代建築の保存・研究にかかわる学術団体である一般社団法人DOCOMOMO Japanによって、日本を代表する近代建築に「関西大学千里山キャンパスにおける村野藤吾建物群」が選定された。大学建築の選定物件は約20あるが、群としてキャンパス全体の環境が評価されるものは少ない。近代建築の保存は、近年、Living Heritage（生きている遺産）として、手を加え活用しながら継承していくことが求められる。村野が求めたやわらかさやあそびのある人の居場所は、今日の大学キャンパスに求められている環境と異なるものではないだろう。大学の歩みを体现する建築遺産を受け継ぎつつ、いま生きている大学キャンパスであることが求められる。